

## 期待にこたえ、問題を解決し、 岩手における社会福祉研究を発信するために

岩手県立大学社会福祉学部長

高澤 武司

開学してから1年。

慌ただしく初年度の仕事を縫うようにして、私たちは、ここに岩手県立大学社会福祉学部「紀要」の創刊号を世に問うところまで、ようやくこぎつけた。

この1年間、学部教員のすべてが、必ずしも研究に専念できたわけではない。すべての新設大学の初年度がそうであるように、新しい教育システムの基盤を作り上げるために必要とした膨大な時間は、赴任以前からの研究の継続にとって必ずしも好条件というわけにはいかなかった。しかし、私たちは、豊かな自然環境と最高水準の研究環境・研究条件を新たに与えられ、また、そのことにまごつきながらも、それぞれの役割を担ってこの1年を過ごしてきた。各地で要請された講演・研修、プロジェクトへの参加、各地・随所のフィールド調査・ヒヤリング調査などについても、各教員は、精力的に全県へ広く展開してきた。その成果のすべてがこの紀要に論文として結実しているわけではなく、継続中のものが多い。研究振興財団による助成研究の成果も含めて、各人・各研究チームの研究成果は、年を重ねて徐々にまとめられていくはずである。

ここに、私たちは先ずともかく、本学部の研究紀要を初年度において創刊できたことについて、素直に喜びたいと思う。同時に、このような形でおこなわれる岩手県および県民各位へのある意味での謝意も、もっとも新設の大学らしいあらわし方ではないかと考えている。

ところで、すでに船出した県立の社会福祉学部としては、共通原則として肝に銘じておくべきことがいくつかある。

私たちは、岩手県の各地・各機関、そして関係する多くの人たちによる長期にわたる大学設置のための準備とその成果の上に、岩手県立大学社会福祉学部に籍をおいて研究と教育に専念する場を与えられた。岩手県民の方々の熱い期待を受けていることも、あらゆる機会にひしひしと感じてきた。私たちが負っている責務と使命はきわめて重く、どのような形にせよ、岩手県立大学としてのプレゼンスを重視するということを基本としているべきである。

大学は、学問的な裏付けをもってこれから世にでる若人のための高等教育機関である。そのためには、教員自身の専門的な知見が社会的に有用であることが不可欠だけでなく、大学全体としてもシンクロナイズされたものでなければならない。その意味では、現在各研究分野で主流となっている共同研究が、一層本学でも進むことになろうし、またそのことによって学問間の壁も崩壊していくはずである。

私たちは、その広がりや岩手県の社会福祉の発展に対する何らかの寄与を願って、先ずこの紀要を創刊したが、今後も年2回の発刊を続けて、次第にその成果を蓄積していくことの手始めとしている。

また、各自の個人業績の公表という性格が強い「紀要」の他に、本学部では99年度から、いわゆる「学内学会」（学生をふくむ学部内全構成員による研究組織）を発足させることにした。これによって、学内外と連携して研究の場をオープンに作りあげ、そのことを契機に、逐次全国規模の学会の招致も予定している。したがって、この研究紀要は、私たちがおこなう研究活動のほんの一部であること、しかし他方では、私たち学部独自のもっとも重要な研究発表の場であると位置付けている。

今、社会福祉研究の分野では、50年スパンの構造的な改革問題と公的介護保険の実施を前にした喫緊の課題が山積している。岩手県に特化した課題においてもその問題解決のための努力を怠ることはできない。しかし、大学の役割は、短期的な直前の諸問題だけでなく、長期にわたる基礎的な研究を続けるという役割と任務も負っている。

そのような双方のバランスのとれた研究成果を、各専門分野にわたってこれから着実に岩手の地より発信していくことにしたい。